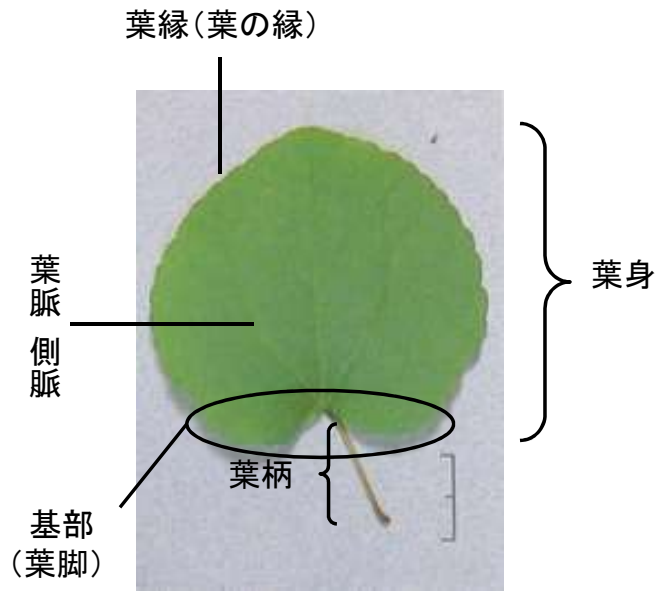


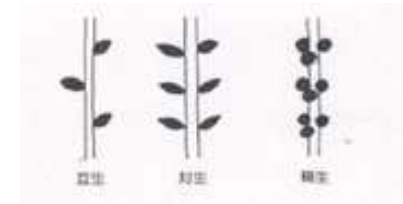
# 樹木の形態に関する用語



葉身



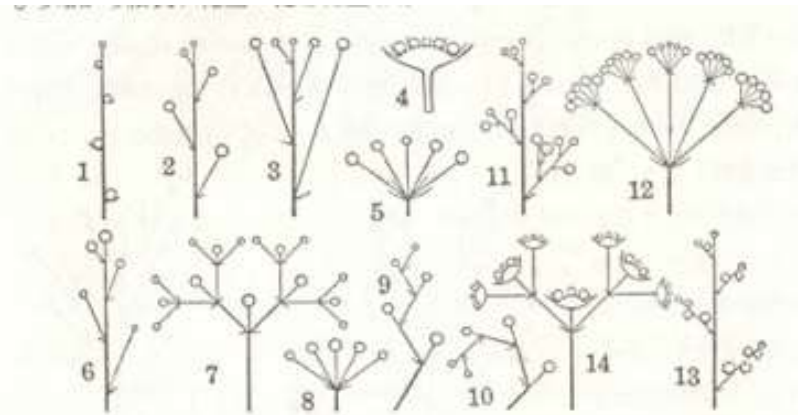
奇数羽状複葉



冬芽のつき方



(右)冬芽に関する用語



1 總状花序, 2 繖状花序, 3 散房花序, 4 頭状花序, 5 散形花序, 6 単出集散花序, 7 二枝集散花序, 8 多出集散花序, 9 互散花序, 10 卷散花序, 11 複繖状花序, 12 複散形花序, 13 繖状繖状花序, 14 頭状二枝集散花序。小円は花をあらわしその大小は開花の順序を示す。【小倉】

(右)花序(集合花)の形態による分類

一つ一つの花を小花という

# 北海道に自生するおもな高木類 Major tree species native to Hokkaido

## Gymnospermae (裸子植物)

Taxaceae (イチイ科) — *Taxus* (イチイ属) — *Taxus cuspidata* (イチイ)

Pinaceae (マツ科) — *Pinus* (マツ属) — *Pinus parviflora* var. *pentaphylla* (キタゴヨウ)  
— *Abies* (モミ属) — *Abies sachalinensis* (トドマツ)  
北海道でもっとも個体数の多い樹種。他の樹種と混交林を形成することが多い。耐陰性が高い。造林面積は最大。



トドマツの樹形: やや枝が上向きにつく



針葉と雌花: 針葉は先端が2裂する (トウヒ類はとがる)



樹皮は平滑で割れない

Pinaceae  
(マツ科)

———— *Picea* (トウヒ属)

*Picea jezoensis* (エゾマツ)  
針広混交林の主要な種。「北海道の木」。種子菌害が多く更新立地が限られる。耐陰性は高い。

*Picea glehnii* (アカエゾマツ)  
純林あるいは混交林を形成。「北海道の木」。種子菌害が多く更新立地が限られる。耐陰性は高い。

Cupressaceae  
(ヒノキ科)

———— *Thujopsis* (アスナロ属)

— *Thujopsis dolabrata* var. *hondae*  
(ヒノキアスナロ、ヒバ)  
渡島半島だけに分布。



エゾマツの樹形: 枝がやや下向きになる



エゾマツの枝: 針葉の先はとがり、断面は扁平。赤が雌花、黄色が雄花



アカエゾマツの樹形: 枝は水平かやや下向き



アカエゾマツノ枝: 針葉は先がとがり、断面は菱形に近い

# Angiospermae (被子植物)

Salicaceae  
(ヤナギ科)

Populus  
(ハコヤナギ属)

*Populus maximowiczii* (ドロノキ)

典型的な陽樹。成長が速く、光合成能力も高い。  
雌雄異株。種子の散布距離は大。種子は短命。

*Populus sieboldii* (ヤマナラシ)

典型的な陽樹。光合成能力も高い。雌雄異株。  
種子の散布距離は大。いわゆるポプラ。



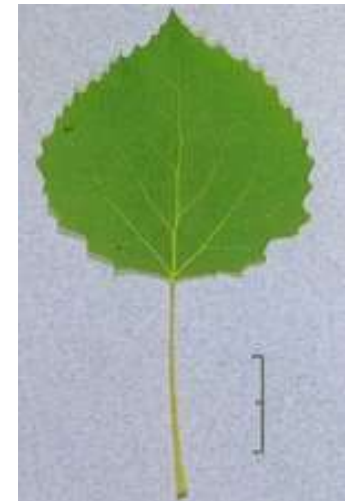
ドロノキの樹形: 大きな個体は直径1m以上に達する。



ドロノキの葉: いわゆるポプラとは異なり、卵形。



ドロノキの種子:  
綿毛を持ち、軽く風に乗って遠くまで散布される。  
ヤマナラシの種子も同じようである。



ヤマナラシの葉: いわゆるポプラ型の葉形である。風に揺られて音が鳴るので、ヤマナラシらしい。

Salicaceae  
(ヤナギ科)

*Chosenia* (ケシヨウヤナギ属)  
1種のみ自生。

*Chosenia arbutifolia* (ケシヨウヤナギ)  
十勝地方に多くみられる。氷河期の遺存種。

*Toisusu* (オオバヤナギ属)  
1種のみ自生。

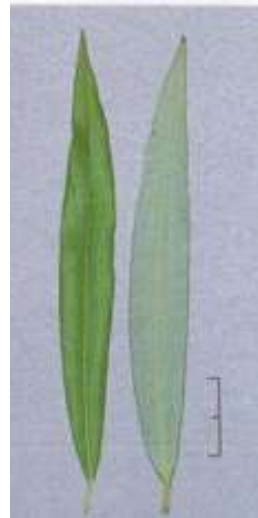
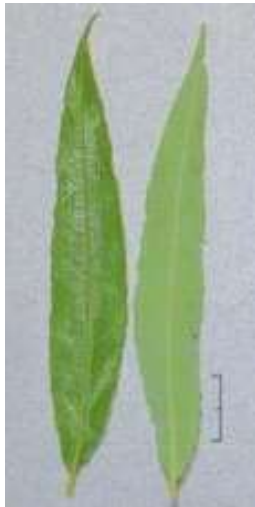
*Toisusu urbaniana* (オオバヤナギ)

*Salix* (ヤナギ属)  
種数が多い。いわゆるヤナギ。

*Salix sachalinensis* (オノエヤナギ)  
湿地や河畔でもっとも普通なヤナギ。雌雄異株。氾濫原などにいち早く侵入する。

*Salix pet-susu* (エゾノキヌヤナギ)  
オノエヤナギとともに個体数の多いヤナギ。雌雄異株。氾濫後などに侵入する。

*Salix hultenii* var. *angustifolia*  
(エゾノバッコヤナギ)  
山地、平地に多いヤナギ。バッコヤナギは石狩低地帯まで分布し、それ以北はエゾノバッコヤナギだけが分布する。雌雄異株。



オノエヤナギ(左)、エゾノキヌヤナギ(中央)、エゾノバッコヤナギ(右)の葉:  
ヤナギ属の種は細長い葉形の種が多い。葉形の特徴だけで同定するのは  
難しい場合が多い。また自然交雑も生じている。

Betulaceae  
(カバノキ科)

*Betula*  
(シラカンバ属)  
異型葉タイプ。  
短枝と長枝を  
分枝する。



シラカンバ(左)とダケカンバ(右)の樹形:シラカンバに比べると、ダケカンバは樹冠を大きく広げた樹形となる傾向がある。樹皮は白色とクリーム色で異なる。



ダケカンバの花序(雄花序):  
シラカンバ属の樹木は雌雄  
同種で、単性花である。花序  
は両生とも尾状花序である。

*Betula platyphylla* var. *japonica* (シラカンバ)  
平地に多いカンバ。典型的な陽樹で、裸地に純林を形成する。生態的寿命は100年ほど。種子は小型、多産であり、飛散距離が長い。

*Betula ermanii* (ダケカンバ)  
平地から高山帯まで分布し、高木限界を形成する。生態的寿命は長く250年ほど。種子は小型、飛散距離が長い。他のカンバ類と交雑種を形成する。

*Betula maximowicziana* (ウダイカンバ)  
平地に分布する。生態的寿命は長く、300年以上。木材として高価であるが、資源は減少している。

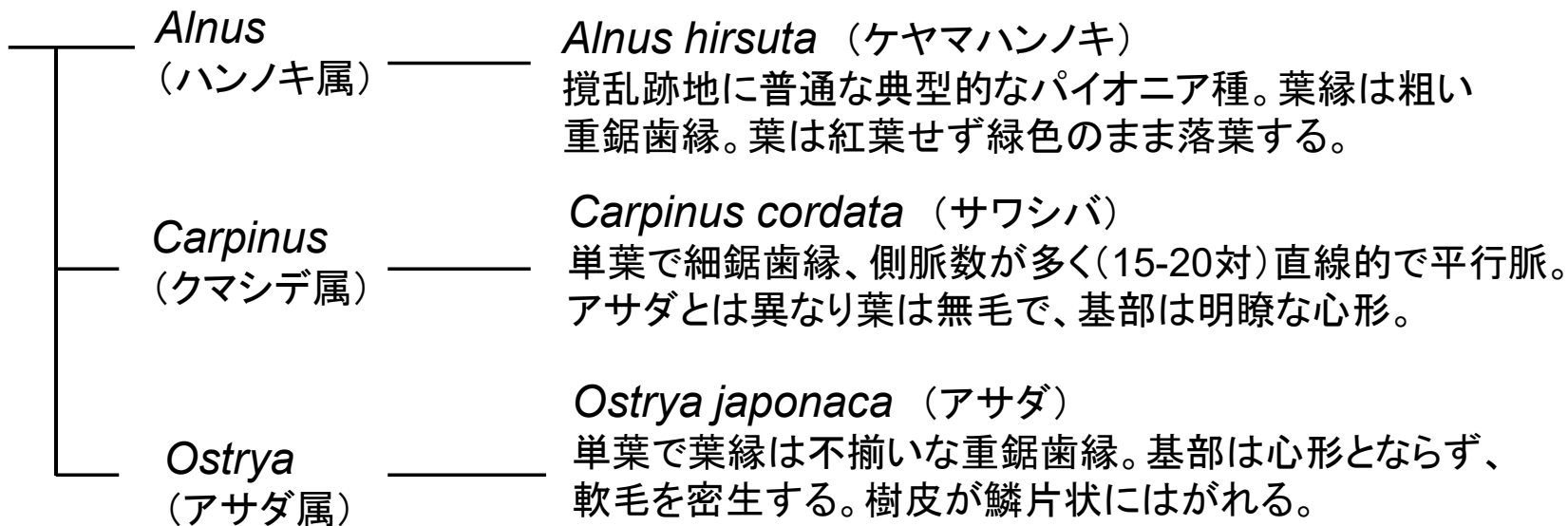


葉形:シラカンバ(左)は三角形に近く、ダケカンバ(右)は基部がやや心形になる。側脈数はダケカンバが7-12対で多い。ウダイカンバの葉は毛が多い。



シラカンバの種子:シラカンバ属の樹木の種子は小型で軽く、翼がある。風散布で飛散距離は長く、数十mから100m以上である。

Betulaceae  
(カバノキ科)



ケヤマハンノキの葉: 鋸歯が粗い。溪畔やかき起こし後など鉱物質土壤が露出した攪乱地に、カンバ類などとともに侵入する。



サワシバの葉: 明瞭な平行脈で、側脈数が多い。小雪地(道南~日高、十勝)に多く、他の樹木の被陰下に生育することが多い。



アサダの葉: 側脈は平行脈であるが、サワシバのように葉身基部は心形ではない。葉や若枝に毛が密生する。樹皮が粗くはがれるのが、特徴。

Juglandaceae  
(クルミ科)

*Juglans*  
(オニグルミ属)

*Juglans ailanthifolia* (オニグルミ)  
やや湿ったところに多い。奇数羽状複葉、小葉は9-21。雄花は尾状花序に近い形態で、雌花は穂状。いわゆる食用のクルミが生る。アレロパシーがあり、造林地の造成時には伐採される。



オニグルミの葉: 奇数羽状複葉で互生する。冬芽は裸芽。



オニグルミの花序: 雄花序は(左)尾状花序に近い形態であり、雌花序は穂状で赤色。



果実: 果実はいわゆるクルミである。食用。一般に市販されているのはテウチグルミなどの栽培種。



Fagaceae  
(ブナ科)

*Fagus*  
(ブナ属)

*Fagus crenata* (ブナ)

道南黒松内低地帯以南に分布。冷温帯の標徴種。葉縁は波状鋸齒縁で、互生する。堅果は3稜があり、総苞に包まれる。



ブナの葉形



ブナの果実: 全体を総苞に包まれる



ブナの樹皮: 灰白色で平滑

*Quercus*  
(コナラ属)

*Quercus mongolica* var. *grosseserrata* (ミズナラ)

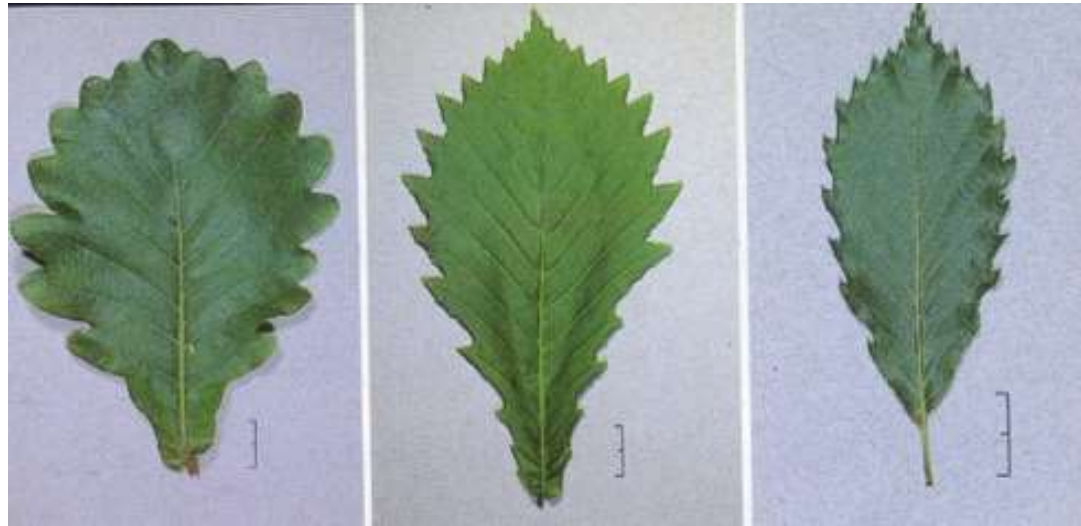
単葉で互生する。葉縁は大きな鋸齒縁であり、先はとがる。葉柄はごく短い。果実はいわゆるドングリで、総苞は杯状で総苞片は反り返らない。冬芽の頂生側芽は輪生状につく。木材として優秀。

*Quercus dentata* (カシワ)

葉形はミズナラに似るが、葉縁は波状の大きな鋸齒で、先はあまりとがらない。葉の裏面と1年生枝に毛を密生する。堅果の総苞片は反り返る。十勝地方の平野部に多い。

*Quercus serrata* (コナラ)

葉の形はミズナラに似るが、小型であり、鋭鋸齒縁。ミズナラに比べると葉柄が明らかに長い。堅果も小型である。



カシワ(左)、ミズナラ(中央)、コナラ(右)の葉形:カシワは他の2種に比べて鋸歯が波状で鋭くとがらないのが特徴。また冬遅くまで枯れ葉が落ちない。ミズナラの葉は、コナラに比べて大きく、葉柄がごく短いのが特徴。コナラは葉柄が明瞭である。



コナラの雄花序(左)と雌花序(右):  
コナラ属の樹木の花はよく似ている。  
雄花序は尾状花序であり、雌花序は  
新枝の上部につくが、小さく目立たない。



カシワ(左)とミズナラ(右)の堅果:コナラ属樹木の果実はいわゆるどんぐり  
である。カシワはキャップ(総苞)の総苞片が反り返るが、ミズナラとコナラでは  
反り返らない。堅果は小動物によって捕食され、分散貯蔵され、食い残された  
堅果が翌年発芽する。